
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 195

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 3881. 造形運動: 体験と経験および人間発達
- 3882. 時を通じた濾過と発達: 取り巻く条件ならびに環境と発達
- 3883. 三大陸を行き来する自分を暗示する夢
- 3884. 離れた場所と高い場所に関する夢
- 3885. 今朝方の夢の続き
- 3886. 環境および非標準的ライフイベントと発達
- 3887. 人生とトランジション: 多声と自己
- 3888. 創造・発達と未知性
- 3889. 今朝方の夢
- 3890. 夢と精神エネルギー
- 3891. 未知性と創造活動: 学びに対するあり方の変容
- 3892. 映画観賞の再開に向けて
- 3893. 自己を深める孤独さについて
- 3894. 今朝方の夢
- 3895. 【パリ小旅行記】フローニンゲンを出発した列車の中より
- 3896. 【パリ小旅行記】パリに向かう列車より
- 3897. 【パリ小旅行記】死都と化す世界の大都市
- 3898. 【パリ小旅行記】三年ぶりに白米を食べて
- 3899. 【パリ小旅行記】進行する人類家畜化現象
- 3900. 【パリ小旅行記】過食の危険さ: 「全ての創造は旅である」

時刻は午後三時半を過ぎた。これから近所の河川敷のサイクリングロードに散歩に出かけようと思う。今日はすこぶる天気が良いので、昨日と同様に、歩く距離を幾分か伸ばそうと思う。

昼食前に曲を作っている最中に、私たちの内側に存在している絶え間ない造形運動について考えていた。それは私の場合であれば、言葉と音楽という形を伴って行われる。こうした造形運動は、ひょっとすると、発達運動そのものだと言えるのではないかと思った。また、そうした運動そのものが、ある一人の人間の固有性を規定するとさえ言えるかもしれない。そうであれば、その運動そのものが、自らの固有性の核にあるという点において、それは魂の運動と言えるように思えてくる。

昼食前に作曲をし終わると、改めて、メロディーとハーモニーについてはしっかりと学習を進めていく必要があると実感した。そうした学習を怠っては、いつまで経ってもメロディーとハーモニーの創出に進展をもたらすことはできないだろう。

そもそも理論というものは、生理的に生まれてくる感覚に適切な形をもたらすものなのかもしれない。理論がない状態で形を生み出そうとすると、確かにそれは時にそれなりの形を生み出すが、それは往々にして極めて混沌としたものに陥りがちである。理論というのは何らかの方向性をもたらすものであり、作曲においては、内的感覚を形にする際の方向性を提示するものであり、同時にそれは即、内的感覚に適切な形をもたらす枠組みになりうる。

作曲という創造活動に並行して音楽理論や作曲理論を学ぶことによって、これまで発達科学や学習科学を学んでいる時にはあまり疑問に思わなかった、理論とはそもそもいかなるものであるのかに対する問題意識が高まっているように思う。ここからは、理論というものがいかなるものなのかについて、その意味を自ら造形していこうと思う。

今日は午前中と午後に、森有正先生の日記を読んでいた。森先生の文章には、いつも自分を刺激してくれる何かがある。それがいかなる条件から生まれ、どのような特性を持つものなのかについてはもう全貌が見えてきている。それは偶然にも、今朝方の日記で書き留めた事柄と密接な関係を持っている。

一見すると、何の変哲も無いように思える日常生活の中で、森羅万象から自己の新たな側面を浮き上がらせていくこと。実存的に真に深く生きる過程の中で、自らの言葉を紡ぎ出し続けていくこと。そのような形で生み出された文章こそが、自分にとっての真の肥やしとなる。そしてその肥やしを真に自己を深めるために活かすには、その肥やしを持って同様のことをしていく必要がある。つまり、日々の生活の中で、一見すると些細な出来事からも学びを得、未だ気づかぬ自己の新たな側面に光を当てるために、自らの言葉を紡ぎ出して行くこと。そうした地道なプロセスを経て、自己はゆっくと深まりを見せていく。

体験は私たちの意識付けによっていかようにも豊かにできる。だが、経験は私たちの意識によってどうこうできるものではなく、私たちの意識を超えた形で変容を遂げていくだけである、という趣旨のことを森先生は述べている。これには全くもって同意である。そこに体験と経験の決定的な違いがあり、人間発達の本質があるように思う。この点についてより実践的に考えてみるならば、私たちは直接的に自他の経験の変容を促すことはできず、可能なことは、経験の変容を導くであろう豊かな体験を積む支援をするに留まるのではないだろうか。

これから散歩に出かけるが、その最中に上述の雑多な考えを整理する必要などなく、ただゆっくと発酵させていきたいと思う。フローニンゲン:2019/2/25(月)16:04

No.1718: Spring Fragrance

The fragrance of spring is opening up, which is very mild and gentle. Groningen, 13:26, Tuesday, 2/26/2019

3882. 時を通じた濾過と発達: 取り巻く条件ならびに環境と発達

つい先ほど散歩から戻ってきた。自宅を出発してから10分程度ランニングをし、残りはゆっくとウォーキングを楽しんだ。驚いたことに、今日の暖かさのためか、目でわかるほど昨日よりも木々のつぼみが開いていた。私はつぼみの付いた枝を撫で、ここから立派な花を咲かせてくれることを願った。

いよいよ本当に春が到来しそうである。確かに朝夕はまだ冷えるが、日中の陽気は春のそれである。散歩をしながら、発達の出発点は、とにかく自分自身の内側にあるということを改めて考えていた。発達は、決して他者の体験を起点にはなし得ない。それは自らの固有の体験を起点として起こるも

のである。多くの場合、人は他者の体験を必死になって参照しようとするが、それらの体験を通じて自らの体験を見つめ直すことは少ないように思う。他者の体験を参照にするときに注意しなければならないのはこの点だろう。

他者の体験は、確かに私たちの発達の特媒になりうる。だが、他者の体験を参照しているだけでは決して自らの発達は起こらない。自己を深めることができるのは、自己に固有の体験であり、それを豊かにしていくことなのだ。とにかく自己を起点に、自己から出発しよう。そのようなことを改めて考えていた。

サイクリングロードの横には運河があり、今日は夕日がいつも以上に美しく水面に反射していた。風が一切なかったこともあり、水面は至って穏やかであり、澄み渡っているように見えた。

日々雑多な体験をし、それらを通じて、雑多な思考や感覚、そして気づきが生まれてくるが、それらを焦って整理する必要など一切なく、時が濾過をしてくれるのを待てばいい。その際に、体験を通じて生じたものを文章として書き留めておくというのは、時による濾過の作用を促進してくれるように思う。書き留められたものは水底に沈んでいってしまうかもしれないが、それはそれで問題ないのである。それが水底に沈んでいくのとは反対方向に、濾過されて水面に浮上してくるものがあるのだから。

感覚や気づきというものを自分の内側に沈めていくためには、それらを形にすることが有益であり、私の場合は言葉と音楽にしていくことだろう。それを通じて上澄みとして現れてくるものの中に、変化の証を見て取ることができだろう。不思議なことに、数ヶ月前に自分が書いた文章を読み返してみると、「もうそこにはいない」という感覚になることがよくあり、それは私自身の変化の現れであり、そしてそれは上述のような事情によって生じているのだろう。

今日はこれから、夕食前に再度作曲実践を行う。今、書斎の中ではスクリヤービンのピアノ曲が流れており、今からの作曲実践では、スクリヤービンの曲に範を求める。今日もまた、探究活動と創造活動に旺盛に取り組む形で時間が流れていく。

ふと、確かに、今の私を取り巻いている諸々の条件は恵まれたものに見えるかもしれないということについて考えていた。だが、本当に恵まれた条件というものが存在するのかどうかは疑わしい。

というのも、確かに現在の自分を取り巻く環境は、ある観点(例:物理的生活環境や経済環境)においては恵まれたものだが、全く別の観点(例:実存的環境)においてみれば、恵まれているとはいえない可能性もあるからだ。

一人の人間として生きる過程の中で、何かを築き上げ、何か事を成し遂げてきた人たちは、果たして恵まれた条件の中にあっただろうか?過去の偉大な思想家や芸術家を見てみると、彼らは決して恵まれた条件の中にいたわけではないことが見えてくる。少なくとも、私の視点から見ればそのように思えることがよくある。彼らは、恵まれない条件の中で克己と自律の精神を持って、そうした条件そのものと格闘しながらも、日々の取り組みに淡々と従事し続けていたのだ。

自己を取り巻く条件ならびに環境と対峙し、その過程の中で絶えず自分の取り組みに粛々と取り組んでいくこと。おそらくそこに、人間の生の本質があり、自己を深める真の道があるように思えてくる。

フローニンゲン:2019/2/25(月)17:14

3883. 三大陸を歩き来する自分を暗示する夢

今朝は六時過ぎに起床し、七時を迎えるあたりから一日の活動を始めた。書斎の窓から外を眺めると、すでに薄明るくなっている。

今日と明日のフローニンゲンは、昨日と同じぐらいに良い天気になるそうだ。今日もまた、午後にも散歩に出かけようと思う。

一日の活動を本格的に始める前に、今朝方の夢について振り返っておきたい。今朝は随分と多い夢を見ていた。一つ一つの夢は短いのだが、その数が多かったように思う。

夢の中で私は、バスに乗ろうとしていた。バスに乗る直前で、偶然にも小中高時代の親友(AF)と出会い、列に並びながら立ち話をしていた。私はバスの運賃がわからなかったので、親友に尋ねてみると、2ユーロとのことであった。それを聞いて、私はバスに乗り込む前に、財布から2ユーロを準備しようとした。だが、財布の中の小銭入れには様々な種類のお金が混ぜこぜで入っており、すぐに2ユーロ分の小銭を取り出すことが難しかった。そうこうしているうちに、バスの乗り口までやってきて、2ユーロぐらいの金額を支払い用の機械の中にさっと入れた。

その時私は、間違えてユーロではなく、円を入れてしまった可能性や、2ユーロではなく、5ユーロ入れてしまった可能性、さらには2ユーロに満たない金額を入れてしまった可能性があるかもしれないと思った。しかしそうした心配とは関係なしに、運転手は私にチケットを渡してくれた。だがその瞬間、バスの運転手は、「お客さん、間違えて16,000ドルを支払っていませんか？」と私に尋ねてきた。ユーロや円ならまだしも、その時の私はドルは持っていなかったもので、自分ではないと答えた。

運転手も笑っていたが、バスのチケットに16,000ドル(およそ180万円)を払うというのはあまり考えられないことである。運転手から受け取ったチケットを財布にしまおうとすると、先ほどまであったはずの無数の小銭がすっかりなくなっていることに気づいた。どうしたものかと私は思い、親友に再度話しかけると、私がバスの運転手と話をしている時に、後ろから見知らぬ外国人がやってきて、ポケットにしまっていた自分の財布に手をかけているように思えた、と親友は述べた。その外国人に小銭を抜き取られてしまったのかと思ったところで夢の場面が変わった。

まずこの夢について少し考えてみると、この数カ月においてバスに乗る夢を何度か見ていることに気づく。それは一体何を暗示しているのだろうか？それは、どこかに自分が向かっていることのサインなのだろうか。仮に移動するのであれば、他の手段も考えられる。私の夢の中で時折登場するのは列車であり、飛行機はほとんど出て来ない。船も滅多に現れてこない。それぞれの交通手段が暗示するものは一体なんなのだろうか。その点に関心がある。

それぞれの交通手段の機能的な違い、さらには自分がそれらの交通手段に対して持っているイメージなどから、それぞれが暗示していることが何かを導き出すことができるかもしれない。当面は、今朝方の夢で現れたバスについて、自分を運ぶバスのような存在は何かという観点を持って考えを巡らせてみようと思う。

一つ確かなことは、今の自分はやはりどこかに向かって動き出しているということだ。それは、円、ユーロ、ドルが混ざっていたという現象からわかるように、三つの異なる大陸を行き来することに向かっている自分がいるのかもしれない。それが正しければ、この夏、やはり私は日本で一、二ヶ月ほど過ごし、その後アメリカで数年ほど生活をするかもしれない。そしてそこから再び、ヨーロッパに戻ってきて生活を送ることになるかもしれない。そのような今後の生活のあり方を暗示するような夢だった。フーニンゲン:2019/2/26(火)07:26

I certainly felt the pulse of buds on a naked tree when I went for a walk in the evening.

Groningen, 18:13, Tuesday, 2/26/2019

3884. 離れた場所と高い場所に関する夢

たった今、一日分のコーヒーを作り始めた。窓の外を見ると、一筋の薄い雲に朝日が反射して、薄ピンク色になっている姿が見える。今日もまろやかな時間が流れていきそうな予感がする。

先ほど今朝方の夢について振り返っていたが、まだその他にもいくつか夢を見ていたので、それらについても覚えている範囲で書き留めておきたい。

夢の中で私は、ある体育館の中にいた。そこは一見すると、実際に通っていた中学校の体育館のように見えるが、少しばかり作りが違っているようにも思えた。

体育館で私はバスケの練習をしており、うちのチームの問題は、シュートの成功率にあると私は考えており、それをいかに向上させるかについて案を練っていた。まずそもそも、一人一人の選手がどれだけの成功率を持っているのかを、距離の異なる5箇所から、2本ずつシュートを打ち、合計で10本打ったシュートがどれだけ入るかを調べてみようというメンバーに提案した。

なぜだか私の横には、小中学時代の友人の女性(MH)が立っており、彼女は部活のマネージャーのような役割を果たしており、私の案に対して質問を一つした。

友人の女性:「それはジャンプシュートで行うの？」

私:「そうした方が実践的だよね。試合の中でセットシュートを打つ時間的余裕がほとんどないことを考えると、ジャンプシュートがいいと思う」

私の回答に対して、友人の女性はうなづき、早速メンバーのシュートの成功率を測定することにした。まずは自分が試しにやってみようと思い、ゴールに向かって左の比較的近い位置からジャンプシュートを打ってみると、ゴールの枠にもネットにもかすりもせずに、ボールが反対側に飛んでしまった。私

は一瞬、「しまった」と思ったが、気を取り直して残りの9本のシュートを打っていった。10本打ったところで、友人の女性が、私の提案にはなかったスリーポイントシュートを最後に打ってみることを勧めた。厳密には、彼女は「ファイブポイントシュート」なるものを考案し、ゴールからとんでもなく離れた距離から、とんでもなく高い場所にあるゴールに向けてシュートをするを提案してきたのである。私はその提案が面白そうだったのでやってみることにした。

ゴールが通常の高さの10倍ほど高く上げられており、それは体育館のカーテンか何かで覆われており、ゴールなどもはや見えなかった。よくよく見ると、それはゴールというよりも、時計であり、時計の長針にボールをうまく当てることができれば成功とのことであった。

私はゴールからとんでもなく離れた場所から、思いっきりボールを投げた。すると、時計に当たったことは確かだが、長針に当たったかどうかは定かではなかった。時計を見ると、正午前を指しており、どうやら私が投げたボールは、正午を少し過ぎたあたりの場所に当たってしまったようだった。そこで夢の場面が変わった。

上記の夢も印象深い。私は中学校時代にバスケ部に入っており、高校でも休憩時間にバスケットを時々やっていたこともあり、バスケットが夢の中に出てくるのがよくある。だが、夢の中の私は当時の自分のように動くことはできず、シュートが思うように入らないことにもどかしく思うことがよくある。今朝方の夢もまた、ある種そうした夢の一つであった。

ただし、今回の夢において目新しかったのは、恐ろしく離れた場所から、恐ろしく高い場所に向けてシュートを打つという行為であった。その提案を持ちかけられた時、私はそれに疑問を挟むことはなく、それは面白そうだとすぐに思った。

恐ろしく離れた場所と恐ろしく高い場所について考えを巡らせると、もしかしたらそれもまた、先ほど書き留めた夢と同様に、自分がそうした場所に向かっていることを暗示しているように思えた。仮にこの夏から日本で一、二ヶ月ほど生活をし、そこから再びアメリカに行くことになれば、今いるヨーロッパから見れば、日本とアメリカの物理的・精神的な距離はやはり遠く、それを暗示しているように思える。だがそれは、「離れた場所」というシンボルについてしか説明できていない。それでは、「高い場所」というのはどういう意味なのだろうか。それはもしかすると、再び日本とアメリカの両国に戻るこ

とを通じて、自分が精神的な高みに向かって歩みを進めようとしていることを暗示していると言えるかもしれない。物理的・精神的に離れた場所に行き、そこから精神的に高い場所に向かっていこうとする自分の姿、ないしは魂の姿を見て取ることができそうだ。フローニンゲン:2019/2/26(火)
07:58

No.1720: Circulation

Seasons circulate, and so our life does. This reality might be constructed by circulating phenomena. Groningen, 08:33, Wednesday, 2/27/2019

3885. 今朝方の夢の続き

今朝方の夢については随分と書き留めたように思うが、その他にもまだ夢を見ていたので、それらについても書き留めておきたい。夢の中で私は、幼少時代に住んでいた家の近所の砂浜を歩いていた。

瀬戸内海らしく、波は穏やかであり、私は心地良い太陽の光を全身に浴びていた。しばらく砂浜を歩いていると暑くなってきたので、上半身裸になった。すると、本来そこにあるはずのない、バス釣りの際によく足を運んでいた沼が前方に見えた。やたらと暑さを感じていたため、私は迷うことなく沼に飛び込み、沼のこちら側の岸から反対側の岸に向かって泳ぎ始めた。

対岸に到着すると、そこは沼なのだから、あまり綺麗な水ではないと私はその時ようやく気付いた。しかし、すでに泳ぎ終えてしまった今となつては、もうそれを気にしてもしょうがないと思い、再び砂浜に戻って歩くことにした。とはいえ、体全身をシャワーか何かで洗い流したいという思いが現れたため、近くのシャワー室兼更衣室に向かった。すると、砂浜からひとつ向こう側の道を誰かが歩いている姿を見かけた。

どうやらそこを歩いているのは三人家族のようであり、こちらからは顔が見えなかったが、小さな女の子と両親がそこにいるように思えた。どういうわけか、私は自分の姿を見られたくないと思い、海岸線沿いに植えられた無数の松に姿を隠すようにしながら、来た道を引き返すことにした。

そこで夢の場面が変わった。次の夢の中で私は、見覚えのないレストランにいた。雰囲気から察するに、そこはヨーロッパのどこかの国のレストランだと思う。

私は四人掛けのテーブルに両親と一緒に腰掛けた。そこはバイキング形式のレストランであり、父は料理を取ってくると述べて、すぐさまその場を離れた。

私の右横のテーブルには、イギリス人の三人組が昼食を食べていた。二人の女性と、一人の男性が、ご飯を食べながら談笑しており、どうやら男性と一人の女性は夫婦のようであり、もう一人の女性は、どちらかの母親のようだった。すると、私の母も父を追うように、ご飯を取りに行くと述べて席を離れた。すると、隣のテーブルに座っていたイギリス人の男性も席を離れ、ご飯を取りに行き、私の母よりも先にテーブルに戻ってこようとしていた。

すると、その男性はテーブルを間違えたのか、私の真ん前に何気なく腰掛けようとした。すると私は、「そこは私の母の席です」と彼に伝えた。私が突然そのように述べたものだから、その男性は聞き取りにくかったのか、私が何と言ったかを聞き返してきた。私は再度同じことを言うと、それに対して、私の右に座っていた、二人のイギリス人のどちらかの母親らしき人が、「彼が座った席は、あなたのお母さんの席じゃないわ。その横の席よ」と述べた。見ると、確かにその男性は、ごくわずか横にある席に腰掛けていたことがわかった。どうやら私の早とちりのようであり、私は彼らに謝った。

父は相変わらず料理を取りに行ってから戻って来る気配はなく、母が先に戻ってきた。見ると、果物とパンを持ってきていた。私はしっかりしたものが食べたいと思っていたのだが、どうやらこのレストランには、果物やパン、さらにはケーキなどしか置かれていないことに気づいた。そこで夢から覚めた。

今朝方は随分と多くの夢を見ていた。上記の二つの夢についても、それらの夢の中で現れたシンボルについては、今後も考えを巡らせてみようと思う。

今日はこれから早朝の作曲実践をし、その後に読書を行い、昼食前にもう一度作曲実践を行いたいと思う。今日もまた充実した一日になるであろうことを強く予感する。フローニンゲン:2019/2/26
(火)08:29

Farewell to winter embraces various feelings and emotions. Groningen, 18:19, Wednesday,
2/27/2019

3886. 環境および非標準的ライフイベントと発達

気がつけば、時刻が昼食どきに近づいてきている。午前中に一曲ほど作り、そのあとは読書をして時間を過ごしていた。

今、改めて書斎の窓から外を眺めると、綺麗な青空が広がっている。そして、燦然と輝く太陽が、地上に優しい光を降り注いでいる。そのような光景を眺めていると、春の鼻歌が聞こえてくるかのようだ。それはまた、私たちに生命の歌を歌うように誘ってくる。午後からの散歩がとても楽しみになってきた。

こうした環境に身を置いている自分について改めて考えてみたときに、アメリカの発達心理学者ユリー・Bronfenbrennerの理論に考えが及んだ。Bronfenbrennerが指摘するように、発達に影響を与える環境要因には質的差異があり、それらは入れ構造になっている。Bronfenbrennerは、それらの構造をマイクロシステム、メソシステム、エクソシステムの三つに分けた。前者から順に、環境の範囲が拡大していくようなイメージであり、この七年間、アメリカとヨーロッパで生活をする中で、それら三つの環境システムの特徴に影響を強く受ける形で自らの発達が形作られていることがわかる。

まさに発達とは、個人と環境との相互作用によって実現するものであり、この夏から生活地を変えることによって、新たな環境との相互作用によって、自らの発達がいかように形成されていくのかに注目をしていく必要があるだろう。それぞれの生活地の固有性を吟味し、三つの環境システムの特徴についてまずは考察をしていく。その後、それら一つ一つのシステムが自分にどのような影響を与えているのかを考え、さらにはそれら三つのシステムが総合的に自己の発達にどのような影響を与えているのかを考えていく。そうしたことを行うことがまさに、環境から学ぶことの大前提になり、環境を通じた自己涵養につながっていくのだろう。

この夏から生活地を変えることになれば、それはまた静かな、そして大きな変容を自己にもたらすことになるだろう。どこか私は、「自分の知らない自分」に突き動かされていることをよく感じるが、自分の知らない自分とは、発達可能性そのもの、言い換えると、今まさに開かんとする次なる発達段階の自分なのかもしれない。

それはまさに今この瞬間の自己を超えた自己であり、それが常に今この瞬間も開かれようとしている様子を見ると、人間とは現在の中に未来をも埋め込んだ存在なのではないかと思えてくる。そして当然ながら、未来のみならず、過去までもが私たちの内側に絶えず内包されている。

そうしたことを考えてみると、自分の知らない自分というのは、過去の自分でもあり、かつ未来の自分でもあることが見えてくる。さらには、過去も未来も絶えず今というこの瞬間に生起するという特性を踏まえると、自分の知らない自分を知るという営みは、絶えず現在の自分を知るという営みだと言えるだろう。

小鳥がピョピョと鳴き声を上げている。先ほど、背中が淡い黄緑色をした小鳥が街路樹の枝に止まっている姿を見た。とても愛らしい小鳥であった。

今後の人生がいかように進展していくかは誰にもわからないのと同じように、自分の今後の人生もどのように進展していくのかはわからない。ただ一つ言えるであろうことは、これからも様々な国で生活することは間違いなさそうだということだ。それはおそらく、自分にとってユニークな非標準的なライフイベントだと言えるかもしれない。発達理論の考え方を採用するならば、誰もが経験するであろう就職や結婚などという標準的なライフイベントと、その個人だけが経験する非標準的なライフイベントの双方が私たちの発達を形作っていくと言える。

特に私にとっては、多様な国で生活を営むということが、自己の発達に決定的に大きな影響を与えている非標準的なライフイベントになっている。それらのイベントがどのようなタイミングで起こり、それらに対して自分がどのような意味付けを行い、それらとどう向き合っていくのかを今後も考えていくことになりそうだ。フローニンゲン:2019/2/26(火) 11:46

時刻は午後の三時を迎えた。今日は本当に良い天気である。これからもう一曲作ったら、散歩に出かけたいと思う。

今、書斎の窓を開けており、春の香りが部屋に流れ込んでくる。それはとても優しく、とても暖かい香りである。散歩に出かけた時には、この香りがさらに芳醇なものとして知覚されるに違いない。

「今の私は何らかのトランジションにいるのだろうか？」そのような問いが先ほど立った。もしかすると、常に何かしらのトランジションの中にいるのが自分の人生の特徴なのかもしれないが、ここ最近トランジションの特性が色濃く滲み始めているように思う。それはこの夏から生活地を変えることに伴うものであることは間違いないだろう。それはまだやって来ていないにもかかわらず、自己がトランジションを感じ始めているのは不思議だ。

今は、来たるべきトランジションに向けての準備を始めるというトランジションにいるのかもしれない。ウィリアム・ブリッジズが述べるように、人生とはトランジションの連続であり、それを通じて自己を深めるためには、ゆとりの中で一つ一つのトランジションと向き合っていくことが求められる。今私は、確かに何かから何かに向けてのトランジションを体験しようとしており、その体験を咀嚼及び昇華させていくための時間的・精神的なゆとりを絶えず持つておくことを心がけていこうと思う。

ここ最近、バッハのコラールに範を求めることがめっきり減っていることについて考えを巡らせていると、自分の内側にある様々な声について意識が向かった。こうした声と向き合うことは、今から八年前にジョン・エフ・ケネディ大学に留学していた頃に日々行っていたことだとふと思った。その方法として、心理療法の諸々の技法を活用したり、そうした実践を行うグループにも所属していたことが懐かしい。今となっては、自己の内側の多声そのものに焦点を当てるといよりも、その多声が集まったコラールを指揮している者、あるいはそもそも、そうした多声を作った作曲家としての自己の本質に焦点を向けるようになっている。

別の表現をすれば、今の私は、もはや自分の内側の多様な声に耳を傾けるというような実践をすることはなくなり、それよりも、そうした多声を活用して自己を深める新たな曲を創造するような自己構築的営み、ないしは自己解放的営みに従事しているように思える。

毎日日記を書き、曲を作ることによって、多声を生み出す根源的な自己の輪郭が徐々に明らかになっている。形を生み出す実践を経ずして、自己の姿を捉えることはできないのではないかという考えが芽生える。そして、その自己そのものが絶えず変化しているのであるから、絶えず形を生み出す実践をしなければ、自己を理解することなどできないのではないかと思わされる。言うまでもなく、そうした実践と自己理解の双方に終わりはないのだが、そうした実践を行うことと自己理解をしていくということを超えた形で日々の人生が営まれていく可能性は十分にある。言い換えれば、それは実践や自己理解からの解放であり、それが始まって、ようやく自己の本質と一体となった人生が始まるように思えてくる。フローニンゲン:2019/2/26(火)15:25

3888. 創造・発達と未知性

時刻は午後五時半を迎えようとしている。先ほどまで散歩に出かけていた。

今日は昨日よりも暖かく、途中で上着を脱いで半袖でサイクリングロードを歩いていた。歩いている最中は、絶えず静かな意識状態にあり、何か特定のことを考えるというよりも、人間存在の本質や現代社会の有り様に関するぼんやりとした問いが浮かんでは消えを繰り返していた。

先ほど、人は得体が知れないものに魅せられて創造し、得体が知れない自分がその先にいるからそこに向かっていこうとする生き物なのかもしれない、ということを思っていた。

散歩に行く前に作っていた曲をこれから完成させていくが、こうした創造活動に自分を向かわせているものは何かというと、端的には未知性なのだと思う。いつも曲を作る前に、これからどのような曲が生まれるのかを心底楽しみにしている自分がある。どのような曲が生まれるかはほぼ全く予想ができないのだ。曲を作りながら徐々にその輪郭が露わになっていくが、最終的な姿は曲が完成してみなければわからない。

未知なるものへ惹きつけられるという性質が、創造性の根幹にあり、さらには人間発達の根幹にあるのではないかと思う。なぜ自分が日記を書き、曲を作るのかの根幹がまた僅かばかり見えてきたように思う。その先に未知なるものがあるからだ。

なぜ自分が発達の歩みを歩いているのだろうか。それは、今の自分の先に未知なる自己が存在しているからだろう。これは自分にとって非常に大切な気づきであった。

午前中に読んでいた書籍の内容を改めて思い出している。社会構成主義車のケネス・ガーデンは、表現活動には新たな可能性を切り拓くような力があると述べている。言葉、音楽、絵画には「生成的言説」としての側面があり、それらは現代の課題を乗り越えていく道を切り開いていく可能性を内包している。そうであれば、表現を通じた創造活動は、上述の通り、未知なるものへ向かっていく運動でありながらも、この時代の課題を克服していくことにつながり得るのではないかという考えが浮かぶ。個人的な創造活動と社会とのつながりをそこに見出す。

今、輝く夕日が西の空に沈もうとしている。その輝きは言葉ではもはや語ることでできないほどに美しい。言葉にならないものをこそ、ぜひとも音楽で表現したいと思うし、できる限りのところまで言葉で接近したいとも思う。

今日も私はフローニンゲンの街にいた。明後日からはパリに数日間滞在する。

この三年間はヨーロッパに身を置いていた。この夏からはどこに身を置くのかまだわからない。

社会構成主義の立場に立ってみれば、現代の思想や慣行は、それらが仮に洗練されていたとしても、それらは自国に根ざす文化や歴史の上に構築された前提にすぎず、そうした前提を絶えず検証することが重要になるというのは納得がいく。そうした検証をしなければ、おそらく現代の病理は何も解決されない。そうした検証作業に自分が関与していくためには何が必要なのだろうか？

そのようなことを考えた時、やはり私は自国の外で生活をするを挙げるだろう。自分が母国の外にいる理由、そしてこれからもできるだけ外に居続けようとする理由が最近よく分かる。その最たる理由は、現代の病理を生み出す自国の前提を客体化させる感性を育み、そうした感覚をもとに病理の解決に向けた関与をしていくためなのだろう。そしてそもそも、物質主義的な生活から距離を置こうとしているのは、物質主義的な世の中に無批判に受け入れられている思想や慣行の前提を問うことに関与していくためなのだろう。

今日も一日がゆっくりと終わりに近づいている。今日もまた、自己に関する様々な気づきと発見があった。そうした気づきや発見を、人間存在と社会に関する気づきや発見にまで高めていくことに従事していく必要がある。フローニンゲン:2019/2/26(火)17:47

3889. 今朝方の夢

夜中に一度も目覚めることもなく、今朝は大変良い睡眠を取ることができた。

時刻は午前六時半を迎えた。辺りはまだ闇に包まれているが、小鳥の鳴き声が近くから聞こえてくる。

明日からはいよいよ二年半ぶりのパリ旅行が始まる。自宅を午前十時ごろ出発し、フローニンゲン駅からスキポール空港駅まで行き、そこで一度乗り換える。そしてそこからパリまで列車で移動する。パリ市内に到着するのは午後四時半ごろになるだろう。

フローニンゲンもパリも、ここ最近では春の陽気を感じさせてくれるような日々が続いていた。しかし明日からは、どうやら曇りや小雨が降る日が続くようである。春が訪れたかと思いきや、来週からは気温も下がり、幾分冬に後戻りしたかのようである。このように、行きつ戻りつを繰り返しながら進んで行く季節を見ていると、それはまさに人間発達の本質を示していることが分かる。

私たち人間も、直線的には発達していかない。行きつ戻りつを繰り返しながら、非線形的に徐々に発達の足取りを前に進めていくのは、人間も季節も同じようだ。

いつもと同じように、今朝方の夢について振り返っておきたい。夢の中で私は、現在協働中のある企業の方と教室のような場所で話をしていた。何か具体的に仕事の話をしていただけではなく、今後の協働プロジェクトのメンバー構成についてざっくばらんに話をしていた。私の方で二人ほど紹介したい若い研究者がいることをその方に伝えると、ぜひ一度会ってみたいとのことであった。それを聞いて、私はすぐに二人に連絡をした。

すると、二人はすぐに教室に姿を現した。まさかこれほど早くその方と二人を引き合わせるようになるとは思ってもいなかったため、話の進展に私自身も驚いた。とりあえず、二人は過去の経歴につ

いて話をし、どのような理由から次の協働プロジェクトに参画したいのかを述べた。二人のうち、より若い研究者がその理由を述べたとき、表現が幾分拙い印象があり、それは協働者の方に不信感を抱かせかねないと思った私は、彼の言葉を少し補足した。

協働者の方は、私の補足を聞いて納得したようであったが、まだそれほど彼らに興味を持っていないようだった。そのようなことを教室で行っていると、何人かの人たちが教室に入ってきた。その中には、高校時代の女性友達(KY)がいて、その中のまた別の人が、進化論に関するディスカッションのファシリテーター役を務め始めた。先ほどまでは、協働者の方と雑談をしていたので、突然進化論をテーマにした話が始まったことには驚いたが、面白そうなので私もディスカッションに参加した。

ファシリテーターの方がまずお題を出し、それについてみんなで意見交換をしていった。高校時代の友人は、普段はクラスの中で発言することなどほとんどなかったのだが、この日は進化論について自説を力強く展開していた。私はそれを聞きながら、ディスカッションの最後に何か総括的なコメントをしようと考えていた。そこで夢の場面が変わった。今朝方の夢について覚えているのはそのぐらいである。いやその他にもそういえば、一軒家の中の畳部屋にいて、二つの背の低い机が置かれており、そのうちの片方の机で勉強しようとしている自分がいた夢も覚えている。

電気をつけて勉強をしたかったのだが、電気的位置が微妙であり、片方の机には全く電気が当たらないようになっていた。もう一方の机には電気スタンドがあったのはいいが、それが繋がれている電源に不具合があるようであり、電気スタンドが灯らなかった。

電気をどうするかを考えていると、一階から母が私を呼ぶ声が聞こえ、母の話によると、どうやらこの部屋は電気に問題があることがわかった。とはいえ私はそこで勉強をしたかったので、机を移動させ、なんとか明かりが机に当たるようにして勉強を始めようとした。そのような夢も覚えている。フローニンゲン:2019/2/27(水)06:57

No.1722: Wriggling

It is very foggy today. Seeing the dense fog, I'm feeling something wriggling in the world.

Groningen, 08:03, Thursday, 2/28/2019

時刻は午前七時を迎えた。二月もいよいよ終わりに近づいている。パリに行く明日がちょうど二月最後の日となる。明日以降からは快晴の日は少なくなるが、今日のフローニンゲンは申し分ない天気のようにあるため、夕方に散歩に出かけたいと思う。今日は昨日よりも1度ほど最高気温が高く、昨日は、散歩の途中で半袖になっていたことを考えると、今日も途中からは半袖で散歩をすることになるだろう。今日の散歩の途中でも、木々に付いているつぼみの脈動を確かに感じたいと思う。

先ほど、今朝方の夢について振り返っていた。夢日記をつけることは、もう毎日の習慣と化した。どれほど断片的な記憶であったとしても、それを辿ることによって、そこから記憶が蘇ることがよくある。今朝もまたそのような現象に遭遇した。

夢について書き留め、分析的な観点でそれを読み返すことは、自らに精神分析を施し、自己理解を深めることにつながっているのかもしれないと改めて思う。とりわけ、夢というものが自分の深層意識から生まれ、時にその根源が抑圧された何かであることを考えると、夢を書き留めることによって、抑圧されたものが解放に向かっていく姿を見て取ることができる。

おそらく私の内側には、まだ無数の抑圧されたものがあり、それは精神エネルギーの滞りとなっているはずだ。夢日記を綴ることは、そうした滞りを解消し、精神エネルギーの流れを改善していくことに寄与しているように思う。この習慣を続けることによって、精神エネルギーの充足がもたらされていることを確かに感じている。今後は、夢の内容を言葉として書き留めるだけではなく、音楽の形にしていくことも行なっていきたいと思う。

夢の記憶から曲を直接作っていくことが難しければ、一度言葉の形にし、その言葉から喚起される感覚を曲にしていけばいい。言葉のみならず、音楽という方向性からも夢を取り上げていくことによって、夢から得られる洞察は増していこうと思われる。

時刻は午前七時を過ぎ、この時間帯になると、辺りはすっかり明るくなった。白いカモメと黒い鳥が、互いに別々の方向に飛び去っていく姿を見た。今日はこれから早朝の作曲実践を行う。午前十時から、協働者の方とのミーティングが入っており、今週はそのミーティングが最初で最後のものとなる。

この夏からどこで生活をするのかはまだ決まっていないが、どうも何か動きそうであるという感覚があり、新たな生活環境ではあまり日本語を読む時間がないように予感している。そうしたこともあり、書斎の本棚にある未読の和書、特に永井荷風氏の日記や、福永武彦氏の小説作品を時間を見つけて読み進めていきたいと思う。

作曲実践と読書を行いながらも、夜には、明日からのパリ旅行に向けた身支度をしようと思う。今回の旅は数日間ほどのものであるため、身支度に関しては30分ぐらいで終わるだろうと予想する。いずれにせよ、今日も一日が充実感と共に始まり、そして充実感と共に終わっていくだろう。そして明日からは、新たな充実感を持ってパリに向かうことになるだろうと確信する。フローニンゲン:2019/2/27(水)07:23

No.1723: A Song of Fresh Spring

I'll leave for Paris shortly. I look forward to findings about myself through this trip. Groningen, 08:54, Thursday, 2/28/2019

3891. 未知性と創造活動:学びに対するあり方の変容の

時刻は午後の四時に近づきつつある。この日記を書き留めたら散歩に出かけたいと思う。そして散歩から戻ってきたら、一曲ほど曲を作る予定だ。

作曲においては、何が生み出されるのだろうかという楽しみが常にある。それは今の自分が何を生み出すことができるのかという楽しみでもあり、どのような未知なるものが目の前に生み出されるのかという楽しみでもある。創造活動には、こうした未知との出会いが必ずある。それは人間の発達においても同様だろう。

いつも作曲を通じて実感することは、自分が未知なるものを生み出している感覚であり、それと同時に、これまで未知であった自らの側面に関する気づきを得たという感覚である。言い換えると、そこで表現されている曲は、自分に関する何らかの未知なるものの表れであり、それが曲という形になることによって、初めてそれに気づくことができるという実感がある。

結局、創造活動とは、自分の内側の何かを開くことなのだと思う。私たちは、自己を開きながらでしか発達をなしえない。そのように考えてみると、創造活動と発達運動は不可分の関係にあり、創造活動を営むことは、発達現象を探究することとも不可分であることが見えてくる。

今日もまた、本当に恵まれた天気だ。明日からは少し天気が崩れるようなので、今日の天気の良いさを存分に味わいたいと思う。

季節は巡り、人生も巡る。このリアリティは、巡るもので構成されているのではないだろうか。巡りゆく季節と人生において、日々の小さな変化に気付き、それに対する驚きの感情から探究と実践を出発させていく。それが出発点になければならない。

これから散歩に出かける際には、可能であれば、昨日と比較してどのような変化が外界において見られるかを意識してみようと思う。外界は、自分の内面を映し出す鏡なのだ。外界を見て、そこに変化を見て取った時、自分の内面で何か変化があったことを悟るのはそうした理由によるのだろう。外の変化を通じて、自分の内側の変化を見つめていく。そうしたことを絶えず実践していこう。

今日の午前中に協働者の方とオンラインミーティングを行っている際に、学びに対する自らのあり方が変化していることに気づいた。以前の記事でも書き留めているように、衝動的な学びを行うことはもはや無くなっている。

欧米で過ごしてきた七年間において、おそらく最初の五年間、ないしは六年目を迎える直前までは、何かを駆り立てられているかのような形で探究を行っていたように思う。今は一変して、どこか平穏さどくつろぎの中で探究を進めているような自分がいる。言い換えると、探究への囚われから解放され、探究という言葉を用いる必要がない次元で探究活動に営むことができていると言えるだろう。そうした変化を促したのは、学びを委託されているという確かな感覚と、それを受託している自己に対する気づきだった。今は、学びを委託され、受託しているという意識の中で自らの学びが静かに進行している。

また、以前の私であれば、衝動的な探究を通じて、何か巨大な構築物を一生涯を掛けて作っていくことに意識が強く当てられていた。確かに、現在の学びのあり方を通じて探究を継続させていった結果として、巨大な構築物が出来上がったとしても、そうした構築物を遮二無二に建築していこうと

いう衝動はもはやない。こうした変化を冷静に見てみる時、これから生涯をかけて継続していく自分の真の学びがようやく始まったのだということに気づかされる。フローニンゲン:2019/2/27(水)

16:01

3892. 映画観賞の再開に向けて

時刻は午後五時を迎えた。つい先ほど散歩から戻ってきた。今日は、フローニンゲンの二月末とは思えないほどの暖かさであり、半袖で散歩に出かけても全く問題がなかった。昨日と同じような柔らかな夕日を浴びながら散歩を堪能していた。

道中、毎回観察している木のつぼみを見たとき、昨日よりも気持ち変化があるように思えた。ただし、私がこうも毎日観察を続けているものだから、つぼみの方が恥ずかしがって、花を開くことに躊躇してはいけないと思い、今後は少しばかり観察を控えようと思う。その代わりに、遠くからその様子をそつと見守るということを行いたい。どこまで観察をし、関与をしていくかというのは、人の発達に寄り添う際にも大切なポイントだろう。

ここ数日間の中で、ふと、ここ最近映画をあまり見ていないことに気づいた。アメリカで生活していた四年間のうち、最初の二年半においては比較的良好に映画を見に行っていた。また、数年前に日本で一年ほど生活をしていた時にも、時折映画館に足を運んでいたことを思い出す。一方、フローニンゲンに来てからは、まだ一度も映画館に足を運んでいないことに気づいたのである。

確かに、自宅から映画館までは少し距離があるが、そうした物理的な距離以上に、何か心理的な距離があったように思う。あるいはそもそも、映画を見る時間的なゆとりを日々の生活に持たせることができなかつたり、映画観賞に対する自分なりの意義が見い出せていなかったような状況にあったのだと思う。だが、ここ数日間の中で、改めて映画の意義を考えてみたときに、新たな意味がそこに見い出せるように思えたのである。映画を鑑賞することは、旅をすることと同じような作用があるのではないか。そのような考えが生まれてくる。

ジョン・エフ・ケネディ大学に在籍していた頃は、映画観賞を通じて意識の治癒と変容を促す実践である、“Moview Yoga”を友人と時折行っていたことが懐かしい。映画が持つ治癒と変容作用は、どこか旅が持つそれと似ている。映画を鑑賞することによって、リアリティの新たな側面を見ることを

促されたり、そもそも映画の中のリアリティ世界に自己を置くことを促される点において、それは旅が持つ特性と非常に似ている。

近い将来に、映画館に頻繁に足を運ぶような生活を始めるかもしれない。仮に近くに映画館がない場合であっても、最近ではネットTVなどが普及しているおかげもあり、映画視聴に特化したサービスを活用するなどして、映画を通じて自己及びこの世界を知るといことも再び始めてみてもいいだろうという気持ちが起こっている。

今日はこれから作曲実践をし、夕食後には、明日から始まるパリ旅行に向けた準備をしたい。それは非常にシンプルなものであり、小さなスーツケースに衣服を詰め、ラヴェルの楽譜を入れたらほぼ終わりである。年末に日本語で作成した作曲ノートを今回は持参しようと思っており、それはリュックサックの中に入れることにしたい。

明日は、午前10:48にフローニンゲン駅を出発する列車に乗る。駅構内でコーヒーと昼食を購入する時間的ゆとりを持たせるために、10時をめぐりに自宅を出発し、ゆっくりと歩きながら駅に向かいたいと思う。二年半ぶりのパリとの再会まであと少しだ。フローニンゲン:2019/2/27(水)17:21

3893. 自己を深める孤独さについて

時刻は午前六時半を迎えた。今日からいよいよパリ小旅行が始まる。

午前十時をめぐりに自宅を出発し、10:48フローニンゲン発の列車に乗る予定である。自宅をその時間に出発すれば、駅で昼食とコーヒーを購入する十分な時間があるだろう。

今は霧が辺りを包んでいるが、この霧も徐々に晴れ、自宅を出発する頃には視界も良好になっているだろう。

パリ滞在の初日の今日は、パリに到着するのが午後四時半ということもあり、今日は市内の散策程度に留めようと思う。パリ北駅から歩いて数分のところにあるホテルに滞在することになっており、荷物を置いたら、まずはパリ市内の東部にある楽譜専門店に足を運ぼうと思う。そこは午後七時半ま

で開いているようなので、とりあえず本日訪れてみようと思う。閉店まで二時間弱ほどの時間を使って楽譜を吟味することになるが、仮に時間が足りなければ、また後日この店を訪れることにしたい。

今回の滞在期間中には、合計で三ヶ所の楽譜専門店に足を運ぶ予定でいる。残り二つに関しては、パリ市内の西部にあり、二つの店はほぼ隣接している。それらの店には、土曜日に訪れようと思う。その日はその他にもドビュッシー博物館に行くことをメインにしているが、そこは土曜日は午後の三時からしか開かない。そうした事情もあり、土曜日の午前中は二店の楽譜屋に立ち寄り、そこでゆっくりと楽譜を吟味した後に、ドビュッシー博物館に向かう。

天気予報を確認すると、パリ滞在中はそれほど天気が良くないようである。だが、昨日の予報と今日の予報を確認すると、予報の内容が随分と異なっており、天候の変化が激しいようだ。パリ滞在中は、できるだけ良い天気を楽しみたいものであるが、小雨の降るパリもまた一興だろう。

早朝にふと、孤独について考えていた。フローニンゲンにやってきた一年目においては、非常に強い実存的孤独感に苛まれることがあったが、二年目以降からはそうした孤独を感じることはほとんどなくなった。今この時点においても、最初の年に感じていたような孤独感はない。ひょっとすると孤独感というもの、発達するものなのかもしれない。

いや、孤独を通じて私たちは発達し、その結果として、孤独というものに対する意味付けと受け取り方が変容していくのかもしれない。孤独さには種類があることは確かだが、自己と向き合うために必要な孤独というものがあり、経験上、そうした孤独さの中で自己は深まっていくと言えるように思える。

森有正先生は、真に自己を深めてくれる国外の生活においては、絶対的な孤独があると述べていたのを思い出す。数年前に一度、一年ほど日本で生活をしていたことがあり、その時にも孤独感を感じていたが、その時の孤独感と欧州で体験したそれほどことなく異なる。

日本で経験していた孤独さもそれなりの強さを持っていたが、結局そうした孤独さは、日本との癒着関係から生み出されていたものであるように思う。一方、欧州で体験したそれは、物理的にも精神的にも日本と切り離されることによって生まれた孤独感、あるいは母国との関係性が断たれたことに

よって初めて見えてくる自己の固有性を突きつけられることによって生まれた孤独感だったと述べていいかもしれない。

そのようなことを考えながら、今の私はそうした孤独感をもはや感じていないことに気づいていた。それは幸運なことなのか、不幸なことなのかわからない。上述の通り、自己を深めるために必要な孤独というものは必ず存在しており、それを体験できないというのは不幸なことであるかもしれない。一方で、過去の孤独感を乗り越え、それによって自己を深めることができたのであれば幸運だと言えるかもしれない。いずれにせよ、また別種の孤独感が自分の前に現れる日が来るだろう。そのような予感がする。フローニンゲン:2019/2/28(木)06:50

3894. 今朝方の夢

先ほどまで孤独さについて文章を書いていたが、なぜ今朝方突如、その話題が自分の内側で浮上したのかは定かではない。もしかすると私は、新たな孤独さを必要としている時期に差し掛かっているのかもしれないと思う。

欧州生活の二年目以降からは、実存的な孤独感というものが弱まっていき、三年目はそうした孤独感を感じることはほとんどなかったように思う。実存的な孤独感の先に至ったという感覚があり、絶えず平穏さの漂う精神生活を送っていたように思う。だが、フローニンゲンでの生活に一旦区切りをつけようとしている自分を見ると、新たな生活地において、これまでよりも一段深い孤独感と向き合う必要性を無意識的に感じているのかもしれない。そうした事情があって、今朝方私は、孤独感についてふと考えていたように思う。

今朝方の夢についてまだ振り返りをしていなかったので、夢の内容を書き留めておきたい。ただし、今朝方の夢の内容はほとんど記憶に残っていない。

夢の中で私は、幾層にも階が連なる不思議な駅にいた。その駅の最上階に私はいて、そこから目的地に向かおうとしていた。どうやら私は列車に乗ってこの駅にやってきたようであり、これから駅の階を降りていき、地上からは歩きで目的に向かうことになっていた。駅の最上階にはガラス窓があり、

そこから下の様子を眺めると、その階の高さも手伝って、眼下を眺めることに幾分恐怖感があった。私は、高いところがあまり好きではない。

窓越しに外を少し眺めた後、とりあえず私は一階に向かうことにした。エレベーターを使って下に降りようと思ったのだが、エレベーターが到着するまでに時間がありそうだった。また、エスカレーターを使いながら、徐々に高度を下げつつ外の景色を楽しもうという思いがあったため、私はエスカレーターを使って一階に降りることにした。当然ながら、エスカレーターは上に行くものと下に行くものの二つに分かれていたのだが、どちらのエスカレーターも、人がひとり立てるかどうかのスペースしかなかった。厳密に言えば、両足を横に揃えて立つことができないほどの狭さであり、両足を縦にしなければならなかった。そしてこのエスカレーターの最大の特徴は、一度エスカレーターに足を置くと、一気に進むことであった。

下りのエスカレーターに足を乗せた瞬間に、一気に下の階まで運ばれていくのは爽快ではありながらも、幾分恐怖感を伴うものであった。私は怪我をしないように、立ってエスカレーターに乗るのではなく、しゃがんでエスカレーターに乗った方が良いと判断し、そのような姿勢でエスカレーターを下って行った。

今朝方はそのような夢を見ていた。今朝はその他にも夢を見ていたのであるが、その内容についてはどうも思い出せない。

今日からパリ小旅行が始まり、旅行期間中にどのような夢を見るのか、あるいは夢を見ないのかを含め、無意識がどのような動きを見せるのかは楽しみである。滞在中に何かしらの夢を見たら、普段と同じように、起床してできるだけすぐに文章として書き留めておきたいと思う。すでにパリ旅行に向けた準備を終えているため、今日はこれから早朝の作曲実践をし、その後、少しばかり読書をしたい。その際には、エリック・フロムの”The Anatomy of Human Destructiveness (1973)”を読んでいこうと思う。自宅を出発するまでは、普段と同じような生活を送っていく。フローニンゲン:2019/2/28 (木)07:08

3895.【パリ小旅行記】フローニンゲンを出発した列車の中より

たった今、スキポール空港行きの列車に乗った。列車は間もなく出発する。

これからスキポール空港に行き、飛行機ではなく、空港駅からThalysという特急列車に乗ってパリまで行く。途中で乗り換えることなく、アムステルダムからパリまでは一本で行く。

先ほど自宅を出発した際に、これから始まる旅に対して心高鳴る様子もなく、まるで近所のスーパーに行くかのような気持ちになっていたことは興味深い。「旅に擦れてしまった」というよりも、この人生における日々が常に旅である境地に至っているように感じる。実際に、日々常に新たな発見と気づきがあることを考えると、毎日は旅のようであると捉えて問題ないように思えてくる。朝目覚めてから新たな旅が始まり、夜寝るときにその日の旅を終える。そうした毎日が繰り返されていく。

現在、フローニンゲンで生活をしているのは、旅のひと休憩に過ぎないということがわかってくる。これから私はまた新たな生活地で、新たな旅を始めるだろう。

この三年間は特に平日と休日の境目がなく生活を送っているため、今日が平日の木曜日であるという実感が湧かない。オランダの一つの良さは、平日であっても、時間の流れがせわしなくなることがないということだろう。実際に、午前11時を迎えようとしている今において、フローニンゲンの街を包む雰囲気、そして列車の中の雰囲気は、とても落ち着きがある。そうした中、私はパリに出かけていく。

たった今、列車の出発を伝える汽笛が鳴らされた。フローニンゲンに流れる時の穏やかと同じように、列車が緩やかに出発した。

ここ数日間は、本当に息を呑むほどの美しい青空が広がっていたが、今日は曇りのようだ。早朝には深い霧が出ており、気温もここ数日に比べて低かった。

おそらく、フローニンゲンからどこかに向けて旅に出かけるのは、今回が最後となるのではないかとと思う。この夏からの生活地が決定するのはもう間もなくであり、この初夏にはフローニンゲンを離れる予定だ。そう考えてみると、私がなぜパリを最後の旅行先として選んだのかは定かではない。もちろん、初夏までに時間があれば、まだ訪れたことのない場所の中で、ぜひ足を運んでみたい場所に行くこともあるかと思うため、今回がフローニンゲンを起点にして行う最後の旅かどうかは不確かである。とはいえ、最後になりうる可能性は十分にあるため、それを踏まえて今回の旅を味わいたい。

早いもので今日で二月が終わる。明日からはよいよ三月になる。パリで三月を迎えることになるとは思ってもみなかった。

今回の旅を通じて、二年半前にパリを訪れた自分と現在の自分との差分を確かめたい。この二年半の間に、自分はいかような変貌を遂げたのであろうか。その答えはすべてパリの中にある。パリで得られる感覚の中に、自己の変貌を見て取ることができるだろう。その他にも、今回のパリ旅行を通じて、自己についてどのような発見があるか楽しみである。

今回の旅は、どこか日常の延長線上にありながら、それでいてやはり非日常性を含んだものなのだと感じる。日々の中に常に存在する日常性と非日常性の双方に気づき、それら双方から恩恵を受ける日々がこれからも続いていくだろう。スキポール空港に向かう列車の中:2019/2/28(木)10:57

3896.【パリ小旅行記】パリに向かう列車より

スキポール空港駅に到着し、Thalysに乗り、今ロッテルダムに到着した。Thalysの内装はとても綺麗だが、外装が汚いのは勿体無い。

ここからブリュッセルとアントワープを経由して、パリに到着する。およそ三時間ほどの列車の旅だ。

今朝方、協働者の方からレポートのレビューの依頼があり、スキポール空港までの車内の中で一度目のレビューを行い、つい先ほど二度目のレビューを行った。パリのホテルに着いたら、レビュー済みのファイルを送ろうと思う。つい先ほど、レポートをレビューしている時に、不思議な感覚に陥った。端的には、デジャブ体験をした。

車内の赤いシートと、そのうちの一つに腰掛けて仕事をしている自分に対して既視感があった。それはいつかの夢の中で見た光景とそっくりである。それがいつの夢かは覚えていないが、確かその夢の中では、車内で良い意味での驚きがあったのを覚えている。

これからフランス語圏に入ってくるためか、今切符の確認があったときに、車掌はオランダ語とフランス語の双方を話していた。久しぶりにオランダ語圏の外に出るため、普段慣れ親しんでいる言語空間から外に出たときに、いかなる感覚的変化が見られるかは楽しみだ。

今日はホテルに到着してから余裕があれば、一曲ほど曲を作りたいと思う。今朝は午前十時に自宅を出発したにもかかわらず、五時半前に起床していたためか、出発前に二曲ほど曲を作ることができた。この旅の最中においても、ホテルにいるときは積極的に曲を作りたいと思う。それに合わせて、もちろん日記も執筆していく。

数日前に、創造活動と未知との出会いについて書き留めていたように思う。日記を綴ることにせよ、作曲をするにせよ、そこには未知との遭遇の楽しみがありながら、同時に、その最中における造形の楽しみがあることを忘れてはならない。まるで彫刻を彫って一つの形に辿り着くかのような楽しみがある。

未知との遭遇というのは、文章や曲のピリオドを打った時に現れるものであり、時にはそのプロセスの中にも未知性が滲み出てくることがある。また、造形の楽しみは、言わずもがな創造活動の最中に起こるものである。このように、創造活動には二重にも三重にも楽しみがあることを見て取ることができる。今後は、言葉と音楽の持つ造形作用をいかにこの社会に還元していくかを、より真剣に考えていくフェーズがやってくるだろう。

オランダ語とフランス語、そして英語での車内アナウンスがあった。それは車内にあるバーの案内であり、Thalysに乗り慣れている乗客たちは、バーがどこにあるのかをすでに知っているようであり、彼らはビールを片手に嬉しそうな笑みを浮かべて戻ってきた。フローニンゲンからスキポール空港へ向かう車内とは異なり、少しばかりビジネスパーソンが増えた印象であり、ビールを飲む乗客以外には、仕事に勤しむ人たちの姿を見かける。列車の走る低音と、パソコンを叩く音が聞こえて来る。

この日記を書き終えたら、持参した作曲ノートを読み返したい。先ほども列車を待っている間にノートを読み返していた。このノートを作って良かったと思うのは、それを読み返すたびに、必ず新たな発見があることである。また、このノートはコンパクトであるため、持ち運びに便利であり、ちょっとした隙間時間にノートを読み返すことができる。

単語帳を読み返すかのような感覚で、この旅の最中のみならず、今後もこのノートを読み返し、そこに記載されている事柄を完全に習得したいと思う。パリに向かう列車の中:2019/2/28(木) 14:18

パリに無事に到着し、今、滞在先のホテルの自室でこの日記を書いている。定刻通り、午後四時半過ぎにパリ北駅に到着し、まずはそこからホテルに直行した。

旅行先の国では路上でWifiに繋がらないことがよくあるため、GPS付きの携帯アプリを活用することは大抵できず、いつも事前にダウンロードした地図を頼りにホテルを探す。今回の滞在先は、パリ北駅から歩いて数分のところであり、道も単純(駅から左に出て二つ目の道を曲がるだけ)だと思っていたのだが、少々迷ってしまい、少しばかり時間を食ってホテルに到着した。

ホテルの受付の中年女性はとても親切であり、英語で色々と説明してくれた。その方が英語で話をするのを聞いていると、「今から数十年以上も前は、フランス語が幅を利かせていた時代もあったはずなのに」という思いを持った。それはもちろん、国際的なフランス語の凋落と、英語の侵食の進み具合に対する思いだ。

今回の滞在先は、それほど不便しないほどのスペースの勉強机が備わっており、それに浴槽がある。部屋も綺麗であるため、滞在中は何一つ不自由はしなさそうである、というのが第一印象であった。

ホテルの自室に荷物を置き、まだ時間があつたので、パリ東部の楽譜専門店にちょっと足を伸ばそうと思って携帯で検索をしている最中に、突然雨が降り始めた。最初は小降りであったが、突如雨脚を強め、ホテルから30分ほど歩いた距離にある楽譜屋に行くのが億劫に思えてきてしまった。少し早いがお腹も空いてきていたので、楽譜屋に行くのは土曜日の朝にすることにし、事前に調べていたタイ料理屋に行くことにした。ホテルからタイ料理屋に向かっている最中、やはりパリ市内はとても汚いという印象を私に与え続けていた。これは二年半前にパリを訪れた時にも感じていたことである。

また、道を行き交う人たちの人種や風貌などを見ていると、幾分危険な匂いが漂ってくる。それはもちろん、アムステルダムの中のように、文字通り、マリファナの気持ち悪い匂いが漂ってくるというのではなく、どこか気を抜いてはならないという自己防衛を促す匂いという意味だ。

今回私がパリに訪れたのは、国立ピカソ美術館と、ラヴェルとドビュッシーの博物館を訪れるためであり、好き好んで都会に来たわけではない。おそらくパリの本当の良さを知るには、このようにパリ市内の中心部に宿泊するのではなく、パリ郊外に滞在するのが良いのだろう。

パリ市内が喚起したものは、やはり二年半前と同じであり、「ここに住むことだけは是が非でも避けたい」という思いであり、ニューヨークのマンハッタンや東京の都心部と同様に、人が人として健全に生活を送るための場所ではないことが改めてわかる。

これまでいくつもの世界の主要都市を訪れたり、実際にそこで生活を営んできたが、現代の文明社会において、大都市というのは軒並み「死都(ネクロポリス)」と化しており、人間が健全な精神生活を営むような場所ではなく、せいぜい家畜化された人間が生活をするような場所に成り果てているという印象を受ける。

タイ料理屋に行く最中、道行く人たちを見ていると、現代社会は残酷にも、ここまで家畜化された人間を大量生産し、それを野放しにしているのかと幾分暗澹たる気持ちにさせられた。パリに再訪した最初の印象は、概ねそのようなものになる。パリ:2019/2/28(木)20:28

3898.【パリ小旅行記】三年ぶりに白米を食べて

時刻は午後八時半に近づきつつある。もう少し日記を書き留めたら、今日来たメールに返信をして、早めに就寝をしたい。

今日は三年ぶりの体験をした。それは何かと言うと、白米を食べたことだ。正直なところ、白米を食べることがここまで拒絶反応をもたらすものになるとは思ってもいなかった。

事前に調べたタイ料理屋をすぐに見つけることができ、店の中に入ると、客は誰一人としていなかった。私が店に到着したのは午後の六時であり、現地人にとっては夕食時間には早い頃だったのかもしれない。

店内に入ると、タイ人らしき店員がフランス語で挨拶をしてきた。私はフランス語が話せないため、「こんにちは」程度の挨拶だけフランス語で行い、そこからは英語で会話をした。今回この店を訪れる

のが初めてであったから、メニューについて一通り説明を聞いた後に注文をした。一応、その店員の説明を理解して注文をしたのだが、少し思っているのとは異なる雰囲気料理が運ばれてきた。

メインディッシュとして運ばれてきたのは、豚肉を使った料理なのだが、その半分が大量の白米であり、私は面食らった。すぐに箸をつけてみると、日本の白米のようにふっくらと焚かれておらず、それでいてタイ米のようにパサパサしているわけでもなく、白米の塊が妙に不気味に思えた。味に関しては、豚肉の部分やパクチーの味は美味しかったのだが、白米があまりにも多く、途中からはお腹いっぱいになってきてしまった。

最後に白米を食べたのはいつだったかを振り返ってみたときに、二年前の年末に実家に帰ったときにも、我が家では基本的に玄米を食べる習慣になっており、あの時は白米を食べなかったように思う。そうなってくると、最後に白米を食べたのは、三年前に日本で生活をしていた時、どこかに外食をした際に食べて以来のことではないかと思った。日本で生活をしている時に、自宅で料理をする時には、それと一緒に食べる米は十五穀米であったから、白米を最後に食べたのがいつか思い出せないぐらいであった。

これは私の直感だが、白米はどうも消化器官や脳にあまり良くない影響を与えるのではないかと思う。食べてすぐに感じたより直感的なことは、身体エネルギーの流れを間違いなく滞らせるというものだった。白米を食べることによって、身体が重くなり、身体エネルギーの循環が滞るような感覚があったのである。それに加えて、店内で流れているロック系の低音の音楽が、さらに食欲を減退させていった。言うまでもないが、音楽に関しても、それは私たちの身体エネルギーに直接左右するため、どのような音楽をどのようなタイミングで聞くのかは注意が必要であろう。

このタイ料理屋は、ウェブサイトで見ると期待が持てたのだが、総合的にそれほど満足の行くものではなかった。白米によって相当にお腹が膨れ上がってしまったので、少し休憩してから、腹ごなしに、少し遠回りして散歩しながらホテルに帰ることにした。

帰り道、目にするレストランの中を覗いてみると、軒並み客の数が少ないことに驚いた。時刻は七時に近づいていたため、もう少し客がいてもいいと思ったのだが、どの店も本当に客が少なかった。パ

リの現地人の夕食はもっと遅い時間から始まるのだろうか。そうであれば納得がいくが、そうで無い場合には、パリ市内のレストランの経営は大丈夫なのだろうかと心配してしまう。

ホテルへの帰り道、スーパーを発見し、そこで明日の朝食用の果物と水を購入した。果物に関しては、オーガニックのバナナ、リンゴ、そしてイチゴを購入した。オランダは人間のみならず、果物も肥大化しているのか、パリで売られているオーガニックのバナナとオランダのそれは大きさが随分と異なり、パリのバナナはかなり小ぶりであった。また、普段世界一身長の高い民族に囲まれて生活をしていることもあり、パリ北駅に到着した際には、フランス人が随分と小さく感じられたことを覚えている。

とりとめもないことをつらつらと書いてきた。明日からは、レストランで夕食を摂るのではなく、近所のスーパーでヘルシーそうな惣菜を購入し、それをホテルの自室で食べることにする。パリ:2019/2/28 (木)20:52

3899.【パリ小旅行記】進行する人類家畜化現象

時刻は午後の九時を迎えた。この日記を書き留めたら、パリ滞在の初日を終えるために、ゆっくりと就寝に向けた準備を始めようと思う。

旅に出かけると、やはり普段とは違う環境から刺激を受け、自分の内側に流れ込んでくるものがあるのか、やたらと言葉が溢れてくる。それらは確かに取り留めのないものだが、内側から外側に言葉の形になろうとしている生命であることに変わりがないため、それらをつぶさに言葉にしておきたいと思う。

先ほどの日記の繰り返しになるが、白米とは本当に本来人間が食べるものなのだろうか、と疑ってしまう。そういえば、今から六年前にロサンゼルスに住んでいた時、合気道の師匠から、「洋平さん、知っていましたか。白米が日本人の身体を弱体化させたんですよ」という話を聞いたことがある。

先生は、江戸時代かそこらの日本人は玄米を食べることを習慣にしていたようであり、だがある時から徐々に白米を食す習慣が生まれ——記憶が定かではないが、国家の施策でそうなったというような話だったように思う。記憶が曖昧なため、これについて改めて調べてみる必要がある——、それ以

降、脚気などの栄養に関係する症状が日本人の身体に現れ始めた、というような話を聞いたことがある。

それがどこまで本当かはわからないが、白米が身体にもたらす負担や、身体エネルギーにもたらす好ましくない影響を先ほど直感的に感じたことは確かである。もしかすると、単に先ほどの私は白米を食べ過ぎたことによってそのように感じたのかもしれないが、何を主食にし、それをどれだけ食べるのかには注意が必要のようだ。

一つ間違いなく言えることは、脳を腐敗させ、知性を鈍化させ、寿命を縮めさせる最善の方法は過食だということだ。今日の夕食に、私はタイ料理店で出されたあまり美味しくない大量の白米を全部食べてしまった。これも身を使った一つの実験——あまり繰り返したくない実験——だと思い、そこから得られたことを今後の食生活に活かしたいと思う。とにかく過食は、身体及び精神に害がありそうだということがわかる。

言い換えると、脳と知性を育み、感覚を磨くためには、過食を避けなければならないことが見えてくる。現代の消費社会において、食べることも単なる消費活動に成り果てており、食欲という人間の欲求の中でも最重要なものとして消費経済が紐づくことによって、現代人はますます食に駆り立てられ、その結果として、身体と精神を劣化させていく。そのような構図が見える。しかも最悪なことに、現代社会においては、もはや人間の食べ物とは言えないような人工的な食物が多くの人に際限もなく届けられ、人々はそれらを食らうことに飼育慣らされている。こうした点においても、現代社会において、人類家畜化現象がどうしようもないほどに進行していることが窺える。

今、パリのホテルの自室でこの日記を書いているが、本来静かで平穏な自然の中で生活をすることを望む私が、時折、大都市にやってくるのはもしかすると、現代社会の絶望的な姿を目に焼き付けるためなのかもしれない。できるだけこの世界の大都市には心身を晒したくないというのが正直なところだ。仮にこの夏日本に一時帰国する際にも東京を避け、北海道で過ごすことにしようとしているのは、まさにそした思いの表れだろう。だがそうだとすると、私は時々、このようにして世界の主要都市に出かけているのは、この現代の救いようのない姿を目に焼き付けるためなのだろう。実際には目に焼き付けるだけでなく、それを汚物だと分かった上で、あえて心身に触れさせるようなことを行っている。

一見するとやめればいいことをなぜ今の私が行っているかという、こうした救いようのない側面が現代社会には色濃く存在しているからである。さらに、それは拡大の方向に向かい続けており、それから目を背けて生きることは、決して現代という時代に向き合っていることを意味せず、そのような状態で行う社会関与は表層的なものにとどまるであろうことを知っているからだ。

世界の主要都市を見ていると、それは救いようのないほどに汚染されており、絶望的な気持ちになるが、そうだとでも、それを直視し続けることを通じて、この世界に関与し続けていく。パリ:2019/2/28(木)21:41

3900.【パリ小旅行記】過食の危険さ:「全ての創造は旅である」

さすがにもう日記を書くことはやめようと思ったが、まだ書き足りないので、出てくるものは最後まで形にしておきたいと思う。やはり、今日の夕食に食べたタイ料理は失敗であった。というよりも、大量の白米が目の前に出された時に違和感を感じ、そして途中で満腹感を感じたのだから、それを全部食べる必要などなかったのだ。途中で食べることをやめるという意思の強さが欠けていたのかもしれない。

出された食べ物はできるだけ綺麗に食べたいというのは、私の内側に常にある思いであり、実際に食べ物を無駄にするのは望ましくないが、そうした思いすらも、これまでの私が生きて行く中で獲得した思い込みなのかもしれない。食べ物を全部食べることを良しとするのは、日本の文化的な産物の一つなのかもしれない。それはもちろん、他国においても見られるかもしれず、はたまた、現代社会に広く見られる発想なのかもしれない。

いずれにせよ、タイ料理屋から外に出た時に、今のような満腹の状態に人に襲われたら的確に対処できないと思っていた。今から八年前にアメリカに渡って以降、できるだけアルコールを外で飲まないようにし、満腹を避けるようにしているのは、身体と脳が常に通常通りに稼働することを確保するためであり、万が一の出来事に備えての自己防衛的な理由による。今日はその決まりを破り、少々食べ過ぎてしまったことを反省する。二年半ぶりのパリの初日に、まさかこのような反省をするとは思っていなかった。だがこの反省は大事なことのように思えるため、明日からは食べ過ぎには注意したい。これは旅先だけではなく、普段の生活からも心がけて行くべきことである。

私は普段、昼食と夕食は腹八分よりも少なく、69%～74%ぐらいの量を食べるようにしているが、今日の夕食は92%ぐらいであった。感覚的に、87%を超えると危険だ。それ以上食べると、心身に悪い影響がもたらされるという危険信号が現れる。また、ここ最近では、どれぐらいの量を食べるかという問題のみならず、いかなる質のものを食べるのかということにも感覚が磨かれつつある。

もはや、人間が食べるものとそうではないものの区別が明確であり、人間が食べるものの中でも質的に様々な差があることもわかってきている。食に関しては言いだすときりがないが、話は単純であり、私は質の高いものを適度な量摂るということを心がけるようにしていきたいと思う。質の低いものを食べないこと、仮に質の高いものであったとしても、それを無駄に食べないこと。どちらも自らの意思で判断できないのであれば、それは自分が飼い馴らされた家畜であるという証だろう。

夕方ホテルに到着した時、受付の方が、「地図は入りませんか？」と親切に尋ねてくれた。正直なところ、ホテルのWifiを活用すれば、携帯の地図を見ることができると、物理的な地図はあまり必要ではなかったのだが、とりあえずもらっておくことにした。

先ほど、それを何気なく広げてみると、そこに、「全ての創造は旅である」という言葉が書かれていた。その言葉は、妙に今の自分の心の深くに届いてきた。やはり、創造活動は旅そのものだったのだ。ここ数日間、表現を変えて何度もこの主題について取り上げてきたが、まさにその言葉の通りだ。創造活動も発達も旅なのだ。そこにな未知との出会いがあり、自己を開いていく作用がある。

明日からも、日記や作曲という創造行為に従事していくが、それそのものが旅と同一のものだったのだ。だから今日の日記で私が述べたように、毎日はやはり旅なのだ。創造活動を通じて営まれるこの人生における毎日は、旅に他ならなかったのだ。

実はこの地図にはもう一つ言葉が記されている。それは、「旅は私たちを想像以上に遙か遠くに連れて行ってくれる」というものだ。この言葉についても、もはや語ることは何もないだろう。

旅は私たちを常に刷新してくれ、旅をしなければ見えてこなかった自己の様々な側面を開示してくれる。あるいは、それに気づかせてくれる促しを絶えず行ってくれる。旅を鏡として自己と向き合うことによって、私たちは自己の新たな側面に気づき、それによって自己は新たな方向に向かって歩みを進めていくのである。旅が自己を開き、自己を育ててくれるというのは、そうした事情による。

気づかない間に、普段就寝している午後十時を迎えてしまった。これから就寝しようと思う。今夜どのような夢を見るかが楽しみだ。パリ:2019/2/28(木)22:04